

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2022

課題番号：15K01925

研究課題名（和文）エコロジカル・フェミニズムの日米比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of Ecological Feminism between Japan and the United States

研究代表者

千田 有紀（Senda, Yuki）

武蔵大学・社会学部・教授

研究者番号：70323730

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、カリフォルニア州において環境運動にたずさわる女性たちにインタビュー調査や参与観察を行うことで、フェミニズムとの関係をさぐった。彼らは「母性」という言葉を鍵にしないことによって、むしろ広範な参加者を集めることに成功していた。日本で東日本大震災のあとには「子どもへの責任」という言葉が多用されたが、それはむしろ政治的な対立を避けるためのものであり、かならずしも「母性」に依拠していたわけではない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これらの研究は、フェミニズムは環境問題についてどのように考えられ得るのかという問題意識から出発しており、日本においてはあまり顧みられてこなかったエコフェミニズムの可能性を探るものである。またアメリカにおけるかつての運動や、東日本大震災後にアメリカで起きた運動などについて記述すること自体に、一定の意義があると考えられる。日本では「母性」という言葉よりも、「子どもに対する責任」という言葉がむしろ鍵となっており、今後次世代への倫理について発展させていく必要があることが確認された。

研究成果の概要（英文）：In this study, I investigated the relationship between feminism and environmental movements by conducting interview surveys and participant observations of women involved in environmental movements in California. After the Great East Japan Earthquake, the phrase "responsibility to children" was used frequently heard in the interview or the reported materials in Japan, but it was rather to avoid political confrontation, and "motherhood" is not a key term in them.

研究分野：社会学

キーワード：フェミニズム 母性 比較研究

## 1. 研究開始当初の背景

ジェンダー論において、環境問題はアキレス腱となってきた。多くの女性が実際に環境問題などの運動を担ってきたという現実があるにもかかわらず、フェミニズムとエコロジーの関係をどう考えるべきかについての理論的・実践的な解決策は出されていなかった。とくに実際の環境問題の運動で使用されてきた「母性」という言葉についても賛否両論があり、エコロジカル・フェミニズムをどう評価するかについて、共通の見解があるとは言い難かった。

2011年3月11日に起きた東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故は、女性や母性と環境問題をどのように考えるべきなのかについて、改めて課題を突き付けた。放射能対策を要求する運動の多くが「子ども」の未来への責任というキーワードを使用し、「母親として」の責任という言葉も散見されたのである。

日本における環境と女の問題を探ろうとするエコロジカル・フェミニズム(以下エコフェミと略す)には、やや不幸な歴史がある。イヴァン・イリイチの「ジェンダー」論を紹介しつつエコフェミの思想を深化させようとした青木やよひと、女性に母性や平和や環境などの概念に依拠しながら、男性や産業社会を批判しても既存の二項対立を崩しはしないと批判する上野千鶴子(『女は世界を救えるか』)の間で、所謂「エコフェミ論争」が行われ、エコフェミは「危険」というような言い方で、無視されることになった。そののちマリア・ミース、クラウディア・フォン・ヴェルホーフ、ヴェロニカ・トムゼンの『世界システムと女性』が翻訳され、綿貫礼子、萩原なつ子らによってエコフェミ思想を深められたが、日本ではエコフェミ自体はあまり主流にはなり得なかった。

日本には平和を希求する母親運動などの実践が存在したが、その歴史的評価は定まっているとはいえない。日本の母親運動はそもそも、1954年のビキニ環礁で水爆実験を契機とした「原水爆禁止」運動に端を発している。運動の立役者となった平塚らいてうなどに注目することで、戦前のフェミニズムの文脈とつなげて考察することができる。運動の過程自体は、丸浜江里子による『原水爆署名運動の誕生 東京・杉並の住民パワーと水脈』(凱風社)などに詳しい。またアメリカにおけるエコフェミは、スリーマイル島の原子力発電所の事故から始まっている。つまり母性や平和、エコロジーにかんする女性運動は、ある意味で原子力の問題と密接な関係をもってきたのである。

本研究では、アメリカ、とくにカリフォルニアで行われている反原子力運動を取りあげ、母性、平和、エコロジーの関係について、改めてジェンダーの視点から理論的・実践的に考察することを目的としている。また、反原子力運動がどのように組織されているか、さらに実際にたずさわっているメンバーのライフヒストリーを聞きとることによって、反原発運動がどのように個々人の人生に位置づけられ、意味づけられているのかについて、考察したい。このような研究を通じて最終的には、日米社会の比較研究を行いたいと考えた。

とくにこれまでの研究の過程で、アメリカ社会における実践的な運動のあり方と、「暴力」に反対する際に「正義」という概念が重視されることに、深い関心を寄せるようになった。さらにカリフォルニア、とくにカリフォルニア大学(パークレー校)での調査を通じて培ったネットワークによって、カリフォルニアに福島原子力発電所の事故以前から日本に関心を寄せながら反原子力の運動をおこなっている団体「A Circle of Concern」の存在を知ることになった。A Circle of Concern は、カリフォルニア大学が広島に落とされた原子爆弾の開発に携わっていたことに衝撃を受け、30年以上にわたって原子力に対する反対運動を続けている団体である。木曜日と日曜日の週に2回、必ず大学の門の前に立って、抗議行動をおこなっている。これら抗議行動を通じて、科学技術のあり方、主知主義的な近代的な知のあり方を問い直し、新たな「倫理」を形成しようとしているのである。メンバーは多くが高齢のアメリカ人女性であり、80歳を超える者も少なくない。何度かこの活動に参加し、観察することによって、「母性」という言葉に頼らないエコロジー運動のあり方を興味深く思った。そして何よりも、個々人のライフヒストリーと運動の関わりの面白さを、ぜひ書き留めたいと強く思うようになったのである。

またカリフォルニアには、福島第一発電所の事故以降に形成された運動団体も存在する。発電所から流れ出た放射能は、西海岸にまで流れ着いているからである。月に1度、日本領事館を訪れ、領事に手紙を手渡し、日本政府に働きかけることを訴える活動が行われている。こちらは多くのカリフォルニア在住の日本人女性によって担われており、Circle of Concernも連携をとっている。これらの運動を比較し、また日本における地域に根差した反原子力の運動とも比較研究をおこないたいと考えていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、エコロジーとフェミニズムの関係を問い直し、理論的に深化させることを目的としていた。その際に、カリフォルニアでの反原子力運動に着目し、大学が広島に原子爆弾を開発したことを批判し、日本に関心を寄せながら約30年間活動を続けている団体 Circle of Concern と、福島第一原子力発電所の事故以降、日本領事館への請願活動を行っている団体の調査を行う。女

性が多くかかわっているこれらの運動が、何を課題とし、母性や女性、エコロジーや科学技術についての思想を紡ぎ、どのような倫理を紡ぎあげているのか、比較分析を行い、最終的には日本における運動のみならず、日米の社会の比較研究を行いたいと考えた。

### 3. 研究の方法

本研究ではまず、エコロジカル・フェミニズムの理論的・歴史的整理を行う。その上で、アメリカのカリフォルニアでの反原子力運動の参与観察とインタビューに基づく調査、日本での運動の参与観察を実施した。さらに日本のフェミニストにインタビュー調査をおこない、過去のエコフェミに対する評価、福島第一原子力発電所の事故以降の思想的变化について聞く。日米の運動を比較研究したあと、最終的にはエコロジカル・フェミニズムの可能性、もしくは不可能性について、理論的考察をおこなう。

### 4. 研究成果

カリフォルニアでの運動団体、A Circle of Concernの活動は以下のようなものである。

「1970年代の後半、おそらく1979年この団体、A Circle of Concernは始まった。パークレーで働く研究者たちが、研究のあり方に疑問をもち、大学との契約を更新しなかった。1980年代には多くのひとが運動に参加し、2000人ほどの人々が参加していた。その後はどんどん減少していった。1984年には、多くの人々が逮捕された。カリフォルニアの原子力発電所を止めようという運動があり、多くの人々がその運動に参加したが、上手くいかなかった。カリフォルニアにはたくさんの反原発運動があった。それは自然の運動であった。チェルノブイリのあと、ヨーロッパにも運動が広がった。政府は核兵器は、『戦略』だという。しかし多くの人たちが、原子力の兵器を好まないのは当然のことと思われる。私たちが小学校のときには、核攻撃に備えて机の下に隠れるという訓練があった。核爆弾で攻撃されたときには、地下に潜れというサインが、40年ほど前にはあった。冷戦というのが大きな要因である。ロシアや中国、特にロシアから私たちに「守る」のだと。双方の陣営が兵器をもつことによって、お互いを恐れて、抑止力になるのだと。今でもそう考えている人もいる。

私たちのような世代は、第二次世界大戦後に多くの人々が自分たちも核兵器が必要だと考えるようになったのを覚えている。1930年代生まれのメンバーもいる。1980年代に運動が盛り上がったのは、本当に核兵器を廃絶できると思ったからである。実際にそれは大きなチャンスだった。しかし繰り返すが実際にはうまくいかなかった。

21世紀に入ってからは、福島第一原子力発電所の事故が起こった。これはかつての核兵器の廃絶運動とは異なるが、しかし原子力を憂えているという意味では、変わらない。私たちは、科学技術は万能であるという思想に反対している。またパークレーという地が、原子力爆弾を作ったという責任を感じている。私たちのこの抗議の場所の前の、あのビルにまさに原子力を研究する研究室があったのだ。」

細々と活動を続けているメンバーは女性のほうが多く、彼らは、週に2回の会合を持ち、「Are you with me?」というコールをしていた。それらのコールに人々はときどき、大声で、ときには車のクラクションでこたえていた。その後、近くのレストランやカフェでご飯を食べたりお茶を飲んだりする。こうした活動に何度も参加させてもらううちに、彼らにとって活動は生活の助け合いであり、ある意味での共同体を形成しているのだということに気づかされることになった。コロナによる渡航の差し控えのあとに何うと、メンバーにはさまざまなことが起こり、亡くなられた方も多いことが判明した。活動は細々と2人によって続けられている。「母性」という語は、ある意味で子どもと対になっており、人生のあるステージにおいては強く感じられるが、またあるステージにおいては、感じられないものかもしれない。これらの活動が、高齢の人たちによって、45年以上ものあいだ続けてこられたことは、むしろこうした「母性」に依拠していない、近代社会の科学技術を批判するからこそであったからであるのではないかと思わされた。

またこのA Circle of Concernも連携しNo Nukes Actionに入っていた浜田ちづさんは、毎月11日に、領事館前で抗議して首相に書いた手紙を渡すという、3・11を忘れないという活動を行っていた。これらの毎月11日の活動は終了したが、まだ活動は継続している。そこではこれまで原子力発電所をのことを知らずに暮らしていたという贖罪意識と、日本とアメリカのカリフォルニアをつないで何ができるのだろうか、という切実な問題意識があった。

以上のことを踏まえて、以下の課題を改めて確認する。

今まであまり注目されてこなかったエコフェミに焦点を当て、新たな理論的な可能性を探る。さらにカリフォルニアにおける原子力に反対する女性たちの活動を記録し、分析し、日本に紹介すること。これらの活動は従来ほとんど日本では着目されてこなかった。

その際に「母性」についての語りと科学技術の関連について焦点を当て、近代科学技術批判とフェミニズムの関係について再考することによって、エコフェミのみならず近代社会のジェンダー編成についても反省的に捉えなおすことが可能になる。

これらの調査を踏まえて、日本における原子力に反対するエコロジー運動のあり方と批判することによって、日米の比較研究が可能になる。この研究は、申請者がこれまで行ってきた日米

比較研究の一環として位置付けられる。

また現代進行形の反原子力運動とジェンダーの関係について考える際の糸口を提供することにもなる。

まず は上記において記述したとおりである。とくにここでは書ききれなかった、参加者個々のライフヒストリーは興味深いものであった。 は、カリフォルニアにおける運動では顕著なものではなかった。むしろ「母性」という言葉を使用しないことによって、近代社会の限界と科学技術のあり方を問い、運動を広げていけるという側面があった。それでも多くの女性たちによってこの運動が続けられていること自体が、「母性」には還元はされないものの、近代における科学万能主義に女性のほうがとらわれず、批判的な視野をもち、連帯することができることを意味している。

それは近代社会において、女性の身体が家内に置かれていたからともいえるかもしれないが、さらにいえばケアの役割を担ってきているかもしれない。日本における第2波フェミニズムは、こうした近代社会の「生産性の論理」を激しく批判し、母性もまたこうした近代社会を担ってきたことを指摘している。

に関して言えば、東日本大震災後、福島第一原子力発電所からの放射性物質を問題にする際に、いち早く反応したのは女性週刊誌であった。男性向けの週刊誌においては、こうした問題は「政治的」課題であったが、女性誌では「生活」の問題であり、「子どもたちを守れ」という「子ども」という言葉を使うことにより、政治的な問題とは異なった次元で、差し迫った問題に焦点を当てることが可能になった。また福島の原子力発電所の問題に関しては、母子での避難者に話を聞いたが、その語りがときに「母性」に依拠するのは当然のことであった（しかし焦点はむしろ「子ども」にあったということもできる）。したがって単純に、日米の比較というかたちでは論じられない。

こうした現状を踏まえて、これからどのようなフェミニズムの可能性があるのかについて、私たちは考えていかなければならない。エコロジーの問題をフェミニズムがどう引き取っていくのか、考えていくのかは、フェミニズムにとって不可避の課題である（ ）。そこではおそらく、必ずしも「母性」に立脚する必要はないだろう。現実問題として、未婚化のトレンドのなか、皆婚社会は崩れ、今の若い世代のコーホートの女性が母になる確率は、半分とも推計されている。母性に対する共感が急速に崩れていると同時に、多くのひとの興味を引く言葉は「ケア」などに移ってきている。近代社会の生産性の論理が生み出したもの、そしてそれらがグローバル化のもとでどのように変容を遂げているのかを見据えつつ、ケアとどのような関係を切り結び、それがフェミニズムの課題となるのかを問うことが求められている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 千田有紀	4. 巻 72巻4号
2. 論文標題 フェミニズム、ジェンダー論における差異の政治 - 平等から多様性へ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 416 432
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千田有紀	4. 巻 86
2. 論文標題 リップとフェミニズム	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ピープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 84-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千田有紀	4. 巻 43
2. 論文標題 少子化研究の倫理：何がどのように語られるべきなのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 家族研究年報	6. 最初と最後の頁 47 52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11501/1840994	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千田有紀・白川真澄（インタビューまとめ）	4. 巻 73
2. 論文標題 インタビュー 「上野千鶴子さんに聞く ふざけるな! 「一億総活躍社会」」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ピープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 28-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千田有紀	4. 巻 68
2. 論文標題 「増田レポート」を読む：「輝き」と「死」のはざままで	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 ピープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千田有紀	4. 巻 17巻1号
2. 論文標題 文化の中の子ども虐待 関係性としての虐待	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 子どもの虐待とネグレクト	6. 最初と最後の頁 58-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千田有紀	4. 巻 70
2. 論文標題 カリフォルニアから原発にNO!を発信し続ける 浜田ちづさんに聞く（インタビュー）	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 ピープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 123-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 千田有紀
2. 発表標題 安倍政権の「一億総活躍社会」と女性政策
3. 学会等名 Pan-Yellow Sea Forum（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 千田有紀	4. 発行年 2022年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 135
3. 書名 グローバリゼーションと変わりゆく社会	

1. 著者名 梶村 太市 ・長谷川 京子 ・吉田 容子 ・千田有紀ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 231
3. 書名 離婚後の子どもをどう守るか : 「子どもの利益」と「親の利益」	

1. 著者名 梶村 太市 ・長谷川 京子 ・吉田 容子 ・千田有紀ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 216
3. 書名 離婚後の共同親権とは何か	

1. 著者名 菅原和孝、下條信輔、熊谷晋一郎、千葉雅也、門林岳史、千田有紀、赤川学、高谷幸、櫻村愛子、風間孝	4. 発行年 2015年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 288
3. 書名 身体と親密圏の変容 (岩波講座 現代 第7巻)	

1. 著者名 吉見俊哉、最首悟、榎木野衣、丹羽美之、鈴木邦男、仲程昌徳、南衣映、仲里功、高峰武、藤田和芳、立岩真也、開沼博、千田有紀	4. 発行年 2015年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 336
3. 書名 万博と沖縄返還 1970年前後 (ひとびとの精神史 第5巻)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------